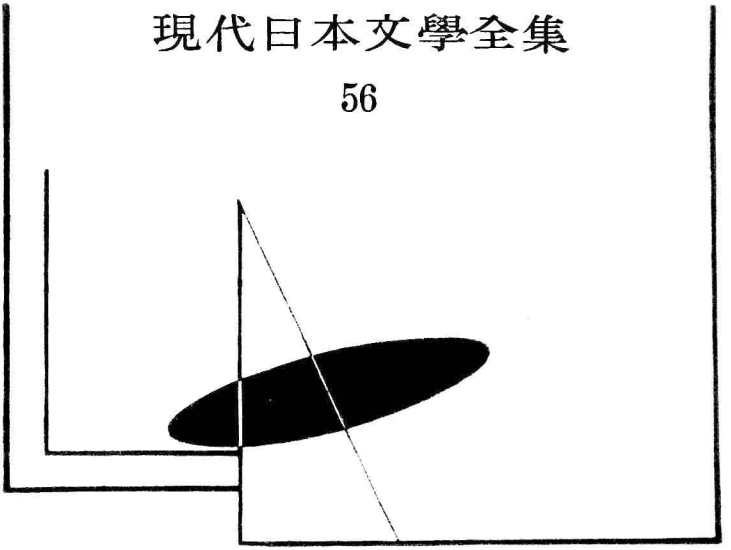
外葉堂果
天風綺青
杉栗本山
小小岡眞
集

現代日本文學全集

56



筑摩書房版

現代日本文學全集 56

外天杉小
葉風栗小
堂綺本岡
果青山眞
集

昭和三十二年六月十日 印刷
昭和三十二年六月十五日 發行

著者 小杉天外 小栗風葉 岡本綺堂 眞山青果

東京都千代田區神田小川町二ノ八
發行者 古田晁

東京都新宿區改代町二三
印刷者 多田基

東京都千代田區神田小川町二ノ八
發行所 筑摩書房
〔電話〕東京二九局(29)七六五一(代表)
振替 東京 一六五七六八

整版 株式會社精興社
印刷 多田印刷株式會社
製本 中央製本印刷株式會社

小杉天外集　目次

初すがた……五
はやり唄……六三

小栗風葉集　目次

亀甲鶴……一二九
五反歩……一六七
深川女房……一七三
世間師……一九〇

岡本綺堂集　目次

修禪寺物語……二〇三
箕輪の心中……二一二
番町皿屋敷……二三一
俳諧師……二四〇
權三と助十……二四九
相馬の金さん……二七二

眞山青果集　目次

南小泉村……二九七
茗荷畠……三二八
玄朴と長英……三三八
江戸城總攻……三五二
林子平の父……三六三
小杉天外（片岡良一）……三八三
小栗風葉論（眞山青果）……三九二
岡本綺堂（秋庭太郎）……三九六
眞山青果氏を論ず（生田長江）……四〇〇
解説……四〇六
年譜……四一四

裝幀　恩地孝四郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

小杉天外集

雲か否か
山か否か
春の海
玄水

初すがた

我はわが嗜好を滿たさんとして詩を作らざるなり、況や評家の嗜好に投ぜんとしてをや、況や讀者の嗜好に投ぜんとしてをや。嗜好は杯上の美酒の如し、愛する者は喜んでこれに就かん、しかも愛せざる者は、其の香を聞いて先づその席を避けんことを思はずんばあらず、我は、美酒の好惡兩者の口舌に適することの、反つて彼の香なく味なき一椀の淡水にしかざるを思ふ、我はわが詩の寧ろ淡水たるに安んず、其の美酒の如くなるをば願はざるなり。

ひそかに思ふ、藝術の美の人を感ぜしむるや、宜しく自然の現象の人の官能に觸るゝが如くなるべし、普遍ならざる可からず、平等ならざる可からず。

我は、讀者のわが作に熱すること、痴女の褻夫の事に悲喜するが如きを欲せず、又わが作に冷なること、行人額上の靨子を望むが如くなるをも厭はず、我はたゞ讀者の空想をして、讀者の官能が猶ほ實世間の事に感ずるが如く感ぜしむるを以てわが作の能事足れりとなさんのみ。

これ初姿起稿の當時わが心頭に往來したるもの、卽ち錄して卷頭の辭となす。

庚子八月　　天外

第一

節は十月十三日、午後の四時と云ふ刻。

「行つて來ちツしやいまし。」と云ふ男女四五人の威勢の好い聲に送られて、福草履を引掛けたまゝ、摺足の小股走りに春木座の茶屋巴屋を出て來た束髮の女客がある。

顏色の蒼白い、背の高い、痩ぎすな三十前後と云ふ年輩であるが、齡には釣合はぬ大柄な紋織御召の二枚小袖に、黑縮緬の長羽織をぞろりと着流し、黃金の指輪の二箇も輝る左手には、銀金具の繻珍の手提鞄を提げてゐる。

「おゝ寒いことよ。」と戸外へ出るや否や、束髮は態とらしく云つて、其の瘠せた肩を萎めた。

「へえ、二三日此方、滅切りお寒くなりやした。」と一歩前に立つた茶屋の若衆は、仕着せ布子の身躰を、お愛想にぶる〳〵と顫はせたが、落掛つた七三の端折をぐいと絞上げて、卒に氣の着いた樣に、「手前が持ませう。」と一つお叩頭して、束髮の手提鞄を持たうとした。

際しも强い風がまた吹通うた、砂塵は黑煙の樣に街に漲つた。束髮ははたと歩を止めて、「あらツ！」と仰山な聲を出して若衆の手に抱縋つたが、ぱツと卷ぢり揚つた着物の下から、燃る樣な緋縮緬の腰卷の露はれたのを隱さうとも爲ずに、はた〳〵と木戸口に駈込んだ。

屋内は既う夜の樣である。入口には、茨城縣水害慈善演藝會と記した長い立看板を立ててある。風の吹込む毎に「ぽゝぽ、ぷぷゝゝゝ」と音を立てる上り口の瓦斯の焰の下には、胸に紅い徽章を着けた羽織袴の、頭髮を奇麗に分けた男が、卓子を前に控へて、入場切符の受取役をして居る。

第二

束髮の女は、茶屋の男の導くまゝ假花道から場内に入つたが、其入ると同時に、崩るゝ樣な拍手の音が起つたので、思はず立止つて騷然する場内を見廻すと、

「あら、玉枝樣玉枝樣。」と呼びながらむツくと起上つたのは、高土間の眞中程位に、其の夫らしい髭のある男と並んでゐた、二十三四の丸髷である。

「おや、國さん其處なの。」と束髮は莞爾して、左右の人の肩を押分けて、危險相に細い欄木を渡ると、背後から茶屋の若衆が、抱へる樣に手を擴げて、

「へえ、少々御免。」と威勢の好い聲で道を拂つて呉れた。

「おゝ怖かツたこと。」と束髮は、丸髷の出した手を力にとんと席に下るや否や、あどけ無い調子で云つて、四邊をきよろ〳〵と見廻した。

「大層遲かツたですなア。」と鬚のある男は後

に引退つて、束髪の坐蒲團を前に直した。
「然うでしたか、既う餘程過ぎて？」と束髪は遠慮も無く男の前に坐つて、「出ようと思つてる處へね、生憎長尻のお客來でね……。本當に厭になツ了つてよ。」
「おや、左樣でございましたか。」と丸髷は素早く茶を酌んで出しながら、「玉枝樣、今ね、大層面白うございましたよ。」
「然う？　何？」と切りと四邊を見ながら云つた。
「或家の息子さんがね、餘り遊び過ぎましてね、船頭に成るツてお嘶なんですよ……。おほゝゝゝ。」と想出し笑をした。
「落語家なの？　私落語は嫌ひ！　だツて下らないもの。」と云ふ時、彼方此方でぱち〳〵と手を拍つ音がしたので、玉枝は初めて舞臺の方に面を向けた。
舞臺の後面は一圓に紅白のだんだら幕で圍ひ、下手には海老茶色の羅紗を被けた卓子を据ゑて、見事な草の生花を載せてある。床は舞臺の眞中に一段小高く設けられて、是には朱毛氈を敷詰め、左右には眞鍮の燭臺を列べてあるが、日覆から吹下す風で、燈火は切りと搖めき、蠟は熾に流るゝのである。
今しも高坐に見はれたのは落語家であるが、玉枝は之には耳を傾けぬ樣子で、土間も桟敷も溢るゝばかりの客を見廻して、
「まア、大した入りだことねえ！」と呟く如くに云つたが、自分から二間ばかり前の新高に、痩せた胡麻鹽頭髪の紳士の、瞬きもせず自分を視詰めて居るのに氣が着くと、吃驚した樣に顏を背向けて、「國さん、大變な奴が來てるよ。」と低聲に力を入れて云つた。
「え、何です？」と落語に聽惚れて居た丸髷は玉枝の顏を覗いた。
「ほら、前の方を御覽よ……。否え、其方ぢやないよ、彼方だよ。」と玉枝は面を仰げずに云つた。
「何處でございます……。おや、斧岡さんが來てるぢやありませんか。」
「靜にお云ひよ、聞えると惡いぢやありませんか。」
「まア。貴女を見てましたよ、まア、ふゝゝゝゝ。」と忍び笑をした。
「何と云ふ厭な奴だらうねえ。好色爺奴！」
「だツて貴女……。ほゝゝゝおほゝゝゝ。」
二人の聲が少し高くなつたので、忽ち「しイツ！」と背後から叱る者がある。お國はさツと赤面して、其の盞口を噤んで了つたが、玉枝は其の聲の出た方をじろりと睨めて、さて退屈相に顏を顰めて、
「本當に下らないねえ。何時まで彼樣な事を饒舌つてるだらう。」と云つて、塵やら莨の煙やらが、薄い靄の樣に漂うてる間に、花瓦斯の焰の青白き光を放つてる高い天井を仰見たが、急に背後に顏を向けて、
「小川樣、既う何ですか、其の……、何がもう出たんですか……。」
「誰ですか。」と男は鬚を捻りながら耳を寄せた。
「彼の、そら……。大變に別嬪だツて評判の……、そら、柳橋の藝妓の娘だとか云ふ……。」
「ぢやア、小しゅんの事てせう。」とお國は口を出して、「否え、未だ出はしませんよ。」
「然う。」と點頭いて、「それぢや何は、彼の……縫之助は？」
「縫之助も未だでございますよ。先刻一人、男の義太夫が出ましたけれども、聲が惡ッて、些とも面白かありませんでしたよ。」と云つて夫の顏を見て、「何と云ひましたツけねえ、彼でも名人の中だツてぢやありませんか。」
「うーん、綾瀨太夫か。」
「然うでしたツけか、何だか知らないけど、くしやくしやな厭な爺さん！」
「然う、それから何樣なのが出て？」
「其からですか、其れからね、清樂の合奏も出ましたしね、女兒の手踊、其れから手品、それから獨樂廻し、講釋……。種々なのが出ましたよ。彼のちらしを持つて來りゃ宜うございましたツけねえ。」
「私もね、餘り急いだもんだからね、出しといて忘れて來たのよ。」
而ると欄隣に居る商人風の男が、
「爰にありますから御覽なさい。」と演藝番組のちらしを寄越した。
「何うも有難う。」と玉枝は目許に笑を含んで輕く點頭き、例の指輪の箝つてる手で其れを受

取つた。

「玉枝様玉枝様。」とお國は袂を引いて、「また斧岡様が此方を見てますよ。」

玉枝は鬱陶し相に皺を寄せて、

「ちよツ、何と云ふ圖々敷い奴だらうねえ。國さん、此方へ來てお呉れな、お前さんと交代らう。」

「可哀相に、お顔ばかしも拜ませて遣れア宜いぢやありませんか。」とお國は笑ひながら云つて玉枝と席を換へた。

「もう眞平、壽命が縮まるよ。」と玉枝も笑ひながら、羽織の裾を拂つて腰を下したが、其機に見るともなしに面を上げると、丁度假花道の上に當る前船に、十二三許の華美なメリンスの羽織を着た小娘と並んで、顏の蒼白い、目鼻容の如何にも優しい、十六七の少年が眼に入つた。

「おや。」と凝と眼を据ゑて、「龍ちやんぢや無いか知ら……？」

「何でございます？」とお國は訝し相に訊ねた。

「いゝえね、」と云つたが、矢張り二階ばかり視詰めて、また獨語のやうに、「何うも龍ちやんの樣だよ、あら、何うしても龍ちやんなんだよ……。」

「玉枝樣、何がでございます？」と話し掛けても耳にも入らぬ樣子なので、お國も玉枝の視線を辿つて二階を見上げると……。

前船は中等席で、孰れも見惡からぬ服裝をした客ばかりの間に、双子か何か知らず、柄も井の字絣の映えぬ布子を着て居るのと、如何にも柔和な、女の樣な顏容して居るのとで、直ぐ玉枝の視てゐる其の十六七の少年が目に着いたが、必然其れとも定めかねて、

「玉枝樣、誰でございます？」

「何うもね……。私は數年見なかツたけれどねえ。」と初めてお國に面を向けて、

「何うも婆やの家に居た龍ちやんて兒の樣なんだよ、彼の口許の可愛ところなんか、何うしても龍ちやんに違ひないんだもの。」

「婆やツて申しますと、今の婆やでございますか。」

「いゝえサ、前の……、國さんの來ない前の婆やなんだよ。」と又も二階を見上げて、「あら、彼の笑ふ樣子なんか、何うしても龍ちやんなんだよ……。」と云ふ時……。

滿場どツと笑ふ聲に和して、拍手の音が宛然大きな油鍋の中に水でも零した樣にぱち〳〵と起つた。舞臺では今藝人が引込んだところで、片しやぎりが續いて響渡つた。

玉枝は何と思つたか、むツくと起上つて二階を視上げてゐたが、

「龍ちやん！　龍ちやんや！」と危んでる樣な語調で呼んで見た。

二階では其の聲が達かぬと見えて、是も同伴らしい櫛卷の三十幾歳と思はるゝ婦人と、面白想に話をしてゐる。うづらや土間に居る客は、皆な眼を睜ツて、黑縮緬の長羽織を流るゝ樣に着た、背のすらりとした、市松の博多の帶に紅色の帶揚を締めた、齡より若裝の玉枝を、笑ひながら眺めてゐる。

「聞えないのか知ら。」と玉枝は躰裁惡いと見えて、誰に云ふとも無く此う云つたが、耐へ切れぬ樣に又一段聲を揚げて、「龍ちやん！　彼の……婆やの家の龍ちやん！」

それでも彼方は平氣で居たが、同伴の小娘が氣が着いたと見えて、少年の袖を引いて何やら耳語くと、涼しい眼できよろ〳〵と見廻し、玉枝と顏を合はせると、驚いた樣に鳥渡叩頭して、忽ち其の顏を赤くした。

「龍ちやん、好く來たことねえ。」と此方は滿面に笑を含んで馴々敷く話しかけた。

「はア。」とまた點頭いた。

「お連があるの？　此處へお出でな。」

而ると彼方ではまた叩頭をして何やら云つたが、聲の低いのと他の騷々敷いのとで聽取れぬのである。

「お出でツてのにねえ、可けないの？」と首を傾げて、「宜いぢやないか、お出でよ、此樣なに廣いんだからサ、よ……。」

「坐つてお呉んなさい。」

背後から怒鳴る者がある。高座には今新たに落語家の登つたところである。

玉枝は流石に顏を赧らめて急に腰を屈めたが、又も二階を見上げて、四邊を氣にする樣に、細いながらも力を籠めた聲で、

「よ、お出でよ、誰も遠慮する人ア居ないんだから、よ……。」

而ると、直き後隣に居る書生風の男が、

「しイツ！」

「喧ましい、すべた奴！」と正面下の大入場から咬着く様に怒鳴る者がある。

玉枝は漸く腰を下したが、それでも前船からは目を離さずに居る。

と、此の前船ばかり視上げて居る玉枝を、物珍らし相に双眼鏡で望いて居る二人の若紳士がある。それは、玉枝とは土間を隔てて遙かに對合つてる西棧敷の四つ目で、二人の他に誰も居らぬのを見れば、殘の人數だけの切符料をも拂つて、此の一桝を買切つたのと鑑定さるゝ。

齡は何れも三十歳位で、一人は黑メルトンの兩前の背廣に同じズボンであるが、其のホワイト襯衣の胸が、天井の瓦斯の反射で、宛然鏡の樣にてか〳〵光つてる。一人は蚊絣の大島紬の小袖に同じ柄の羽織、帶は白縮緬を太く卷いて、之に時計の金鎖を絡らませてゐる。洋服の男よりは背も高く色も白く、擧動も鷹揚であるが、ぎうと合はせた襦袢の襟の故か、にやけた樣にも見えるのである。

「如何だい？　一寸ア好からう。」と背廣は、双眼鏡に眼を吸着けた樣にして居る大島紬を見上げて、嘲る樣に云つた。

「もう餘程の齡だね。」と双眼鏡を離して、「廿五だなんて云ふな嘘だ、扮裝が彼樣なだから若く見えるけれど、もう彼此れ……左樣さ、もう廿七八にはなるね、大丈夫廿七下ぢやないね。」

「さう、然うかも知れんよ。勿論彼の女の廿五は有名な物だからなア。」と片方の眉を上げて笑を耐へる樣な顏をして、ぷーと莨の煙を細く出し、「五六年此方と云ふものは、何時も廿五で持切りだからね。」

「五年此方？　五年此方廿五？　それぢや君……。」と大きな眼を更に大きくしたが、「はゝゝゝあツはゝゝゝゝゝ。」と思はず聲を出して笑つて、急に手巾で顏を隱して俯向きになつて、肩まで動かして笑つた。

背廣は灰を落した葉卷を口許まで持つて來ながら、其葉卷を喫はうともせず、大島紬を默つて眺めて居る眼を切りと瞬いて、軈て對手が顏を上げて「ア、苦しかツた」と云ふ風に涙を拭ふのを覗く樣にして、

「でも一寸は惡く無からう。あれで、玉代三文掛るぢやなしさ。」と喫ひも爲ない葉卷の頭を矢鱈と火鉢に擦りながら、「僕は然う思ふんだがね、如彼云ふ奴に限るね、面白い口說の有る奴ア。まア彼の眼を見給へ眼を、廿五が三十五でも、まんざら捨てたもんぢや無いぢやないか。」

「御執心な事たね、ぢや早速運動して見給へな。」

「運動？　吾輩が物に爲ようて日にア、運動も何もあツたもんか、何だツてもう、三日男に會はなきゃ大病人になるツて代物なんだからね……。」

「ぢや君は、其の大病になるのを待つてると云ふ譯なんだらう。笠田君も亦衰へたる哉だね。」と云つて鼻でくゝと笑つた。

笠田と云ふのは、其樣な青い雜返しなんか耳にも入らないと云ふ風で、

「何うだい、僕が一つ執持たうぢやないか。齡は少々怪しいもんだが、如彼云ふな利益になるね、君等の樣な、まだ修業期の人には。」

「修業期？　修業期は酷だね。」

「酷でも修業期だから仕方がないサ。久し振りで縫之助が出るツてんで、泡ア食つて本鄕まで駈けて來た處を以て見れア、修業期も修業期、まだ、漸く尋常一年と云ふ處だ。」

「僕は何も、泡ア食つた覺がないね。」と笑ひながら、「勿論、今麥酒を飲んだことは飲んだが。」

「だからまア、修業期なんだから、如彼云ふ凄い奴に當つて研究して見たまへよ。」と笑ひを含んだ唇を尖らして葉卷を一つ吸ひ、「何しろ、十五にして色に志しツて代物なんだからね。」

「十五から？　然うか。」

「然うさ、小學校に通ふ時分からなんだツてからね。」と眼を睜つて仰山な顏を作らへて見せ、「其れが今以て彼の風なんだからね。何うだい、彼の扮裝が、赤い物づくめかなんかで、恐れ入るぢやないか。僕は然う思ふんだが、暗い處でお嬢樣て云つたら、必然娘のやうな假聲を遣ふに違ひないね、まア彼の眼色を見給へ、眼色、え、如何だい、接吻なら何時でも宜しいツて顏ぢやないか。」

「妙な顏も有つたもんだ、接吻なら何時でもツて顏は何樣な顏だね？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「卽ち彼の顏さ。」と云つたが、急に驚いた風に、「おや、彼ア鬼岡ぢやないか。」
「鬼岡ツて誰だね。」
笠田は双眼鏡を望きながら、
「やア、鬼だ鬼だ。此れア不思議だ。慈善演藝會に鬼が來るツてな初めてだ。」と獨語の樣に云つた。
「何れが。」と頸を前に伸べて、「何處に居るね？」
「ホラ、彼の妖婦の前に、奇麗な十二三の娘が居るだらう、被布を着た。」
「ん、居る居る。彼の赤く肥つた、紋付の羽織着た男と並んで。」
「然うさ、其の直ぐ隣に、胡麻鹽頭髮の厭な奴が居るさ、痩こけた顏の、ホラ、今妖婦の方を見た、ホラ。」
「あ、彼か、彼の絣の羽織着てる。ふーん。」
「彼が君、斧岡つて評判の高利貸なんだよ。」と笠田は切りと双眼鏡を視詰めて、「何う云ふ血の循環樣で、彼奴がまた此處へ來たもんだらう。」
と云つてる處へ、フロックコートの胸に花の徽章を附けた、顏の小さい、度の強い近眼鏡を懸けた男が此の桝へ入つて來て、
「おい〳〵、笠田君。」と肩を叩いて、「外見ないぢやないか。」
笠田は背後を振返つて、
「いよー是は。」
「其樣なに夢中になツて、何を見てるんだね、些と氣を着け給へな。」
「何うしたね近頃は？」と笠田は滿面に笑を含んで、「まア坐り給へ。」
「暫く會はなかツたね、菊川以來だね。」と臀をしきりに倚せて窮屈相に斜に坐つた。
「フロックコートかなんかで、今日は滿艦飾だね。」と嘲ける樣な顏をして見上げ見下ろし、「小說を作く樣になツたんで、些たア工面が好いと見えるね。」
「其樣な君、人聞の悪い事云ひ給ふな。」と平氣で云つたが、笠田と同伴の大島紬を瞥と見て、
「此の御方は？」
「此方か、ん、僕が紹介爲よう。」と笠田は卷莫を灰に投して、態とらしく眞面目な顏を作り、「此方は瀧山春雄君と云ツてね、京濱銀行の庶務課へ出てゐる方なんだ……。」
而ると瀧山は素早く名刺を出して、
「僕は此う云ふ者ですから、何卒。」と丁寧に頭を下げた。
フロックコートはかくしに手を突込んだが……。
「僕は名刺を忘れて來ましたが……。」
笠田は皆まで云はせず口を出した、
「瀧山君、此の紳士はね、館野秋城と云ふ……左樣さ。」笑ひながら考へて、「早く云や、天下の文豪です。」
「君は可かんよ、初めて會つた人の前で其樣なに嘲弄しちや。」と額に皺を寄せた。
「はア館野樣ですか、」と瀧山は眞面目な顏をして、「御高名は豫ねて承まはツてました、何卒、此樣な俗物ですけれど、御交際を願ひます。」
「何卒宜しく。」とフロックコートは輕く會釋して、「はア、然うですか、貴方は京濱銀行へ出て坐らツしやるんですか。」
「おい〳〵、まだ他に、色男ツて云ふ大事の內職があるんだよ。」と笠田は又も口を出した。
瀧山は思はずにやりと笑つたが、其の顏を微し赧くした。
フロックコートは氣の毒相に、
「お互に、此樣な口の悪い友達を有つちゃ往生ですなア。」と笑ひながら瀧山に云つたが、「笠田君、君、少し慎み給へよ。」
「何だ、慎め？　ふーん。ぢや、君等の方から始めて廻して貰はう。」
「何を？」とフロックコートは、又かと云ふ樣に八を寄せた。
「其の慎みをさ。」と莨の煙をぷうと天井に吹上げて、「君が十八番の、例の安物買は慎み給へ、彼ア仕舞に鼻へ來ますッ。」
「十八番は酷いね。」とフロックコートは躰裁悪相に四邊を見廻した。
笠田の聲が高かつたので、隣に居る切下髮の隱居風の女と、其從者と見える頰の赤い女とが、くゝゝゝと笑出した。
「時に、安物ツて云や、小しゆんとか云ふ奴よ。」と欄に身を凭せて仰向きになツてゐた笠田は、何か大事でも想出したものの如く前に乘

出して、「如何したツてんだい此の人氣が？まア先刻、僕等が來た時、彼の木戸口の騷と云ふものは無かツたねえ、職工だか何だか知らんが、怪しげな服裝の奴等が百人許り、鯨波を作つて押寄せるぢやないか、實に僕ア一驚を喫したね。一躰何うしたツてんだね、彼ア。」

「彼かね、彼は、此まで小しゆんの通つてた工場のね、何とか云つたけよ。」とフロックコートは首を傾げたが、「確か春日とか云ふ樣だツけ、其の男がね、小しゆんの景氣を付けて遣らうてんで、中等切符百枚ツて物を買込んでね、自分の職工に勢揃ひさせて繰込ませるツていふ一件だらう、而ると君、」と云ツたが、自分の聲の高いのに氣が着いたか卒に語調を更へて、「而るとね、縫之助の贔負連が其れを聞付けて、何でも小しゆんに景氣負しちや可けないツてもんで、此奴がまた、百人許りの大連を催ほし立て、詰掛けると云ふ騷だらう……、勿論、縫之助は昨日出る筈だツたが、何うした都合でか、二人とも今日一緒に落合つたもんだからね、そこで彼樣な、先刻の樣な衝突が起つたんだアね、何うして、今に何方か高坐に出て見給へ、まだまだ彼どころぢやない騷が發生るから。」

「ぢや何ですな、双方妨害し合はうツてんですな。」と瀧山は訊ねた。

「無論さ。」と笠田はフロックコートに代つて云ツた、「だから、君は餘程確りせんけりやならないんだ。」

「何故？」

「何故もないもんだ。」と一息に打消して、フロックコートを顧み、「おい、此君はね、縫之助黨の院内總理なんだよ。」

「其樣な君、馬鹿な事を。」と瀧山は顏を赧くした。

「構ふもんか、何も其樣なに祕密にする事は無いさ。」と笑ひながら、「其の襦袢の胴でも見せて、吃驚させて遣り給へ。」と云つて、今度は聲を低くしてフロックコートの方を向き、「おい、此君の着てる襦袢は、中々大したもんだぜ……。」

瀧山はます〳〵赧くなツて、

「其樣な、下らん事止し給へ。」

けれども笠田は平氣なもので、

「一疋の友禪で、縫之助と揃ひの襦袢を拵へるなんか如何だい、君の材料にア成らないかね。」

「然うさね。」とフロックコートは笑つた目で瀧山をぢろりと見た。

好人物の瀧山も流石に怒つたと見えて、二人には面を背向けて、舞臺の方を覗いてゐる。そこで二人も暫し押默つて、同じく床の上に目を向けたが、今しも、何樣な噺をしてるのか、扇子で字を書く眞似をしてゐる落語家のでか〳〵光る顏を見ると、笠田はまた口を開いた。

「おい館野君、過日、君の新聞に出てゐたのは、彼ア全くの事實なんかね――小しゆんの譚が。」

「何うも事實らしいねえ。彼雜報を書いたのは河瀨ツて男だがね、社主の話ぢや、果して柳橋の梅吉の娘とすれば、音聲でも容貌でも、もツと美いだらうツて云ふがね、何ういふもんか。」と首を傾げる。

「もツと美い？　然うかい。」と唇を尖らして眼を圓くしたが、「でも、何だか怪しいね、だツて、其樣な奴な君ら、今迄誰も放棄ツて置く筈がないぢやないか、其の容貌で、其の藝で、十九まで獨身で居るなんて、何だか此奴ア、前後矛盾してるねえ。」

「其點が卽ち、世間の廣い處さ。勿論、男と云ふ男が皆な君の樣だツたら、天下に處女て物が無くなる勘定だからねえ。」

「何だと。」

「はゝゝゝ。」とフロックコートは瀧山と顏を見合はせて笑つた。

「適評適評！」と瀧山も笑出した。

「怪しからん事を云ふね。」と笠田も同じく笑顏を作つたが、「だが、もう樂屋へ來てるかね？」

「小しゆんか、未だ來ない樣だがね。」と云つたが、鼻頭で笑ひながら、「何故？　來て居りや何う仕ようツてんだね？」

「おや、訝う笑ふね、」と云ツて、急に高慢相に反身になり、「何う仕ようと、其處は僕の手腕にありさ。」

「ですが、世間で評判する樣に、實際其樣な美人でせうか。」と瀧山はフロックコートを顧みて、「私の聞いた處ぢや、柳橋の梅吉の娘だと云ふんで、此樣な評判も立つた樣に思ひますが、然うぢやないんですか。」

「まア……。」とフロックコートは首を傾げて、「其點は如何云ふもんですか。」

「何うせ、縫之助の様な譯には參りませんとサ。」と笠田が口を出した。

「先生、館野先生。」と黑眞岡の紋付の羽織に小倉の袴を着けた、何家の食客ででもあらうと云ふ廿歳位の男が入つて來た。

「何だ？」とフロックコートは眼鏡掛けた顏をぐゝつと反した。

「此の方が、鳥渡お目に掛りたいツてますが。」と名刺を出した。

「私にか。」と仔細らしく顏を顰めた。

「否え、何方でも宜いツて申します。」

「ぢや、僕へ持つて來た處が仕様が無いぢやないか、うーん。」と食客の顏を鼻で見る様に仰向きになツて、「吉田君へ持つてお出で、吉田君へ。」

「ですけれど、只今吉田様へ持つて參るりましたら、先生へ願へと仰有いました。」

「吉田君が？　何うも仕様がないね。」と鼓舌して、「此様な事まで僕に押付けるなんか、實に失敬ぢやないか？」

「へえ。」

フロックコートは見るとも無く名刺を眺めて、暫く考へてゐたが、また額に皺を寄せて、

「ぢや、今行くから待たして置け。」と早口に投げる様に云つた。

食客が出て行くと、また何かぶつ〳〵云つたが、漸と思返したらしく、二人へ挨拶を遺して階下へ降りて去つた。笠田は其の跡を見送つて、

「何うだい、彼の威張り様が。」と鼻頭で嘲る様に笑ひ、「小糠三合の癖に……。」と云つたが、はツと氣の着いたことあるらしく慌てて言を斷つて、微し赧くした顏を上げて瀧山を見上げ、

「是は失敬した、はゝゝゝゝ。」

「なんだか耳が痛い様だね。」と瀧山も態とらしく笑顏を作つた。

「だけれど、君とは違ふね、大違ひ。同じ小糠三合と云つても、一つ口にも云はれないさ、彼奴は生活の都合から、自分で運動して養子になツたんだ、だけれど君は何ぢやないか、君は、細君の戀婿ぢやないか、ふゝん、色男は違つたもんだ。」

「其様な馬鹿な事を君……。」とは云つたが、莞爾とした。

「宜いさ、宜いさ、構ふもんか。はゝゝゝゝ、でも、些たア躰裁が惡いかね。」とまた笑つたが、「だけれど、今の、彼の館野の威張り様が何うだい。此の間まで三面ばかし書てた者が、急に先生も可笑いぢやないか、先生と云や、自分の事と思つてるだけが凄じい、はツはゝゝゝゝゝ。」

此の時、拍手の音と共に崩るゝ様な喝采の聲が起つた。二人は談話を止めて舞臺を覗込んだ。床には、でゝく〳〵肥つた五十近い三味線彈の女と列んで、顏色の白い、艶々する、口許の可愛い十八九とも見える娘が、見臺を下目に、少し俯向きになツて、餘り騷々敷いので聲は聞えぬが何やら語つてゐるのである。

「いよー、此は尤物だ。」と笠田は覺えず膝を進めた。

「此ぢやないか知ら。」と瀧山も彼方ばかり視詰めてゐる。

「此だ此だ、此に違ひない。」と笠田は手早く双眼鏡で望きはじめた。

夜具でも着た様に大きく、ドツしりと構へた三味線彈のむくんだ顏と列んだ故か、花車な見臺を前に、撫肩の姿すつきりとして、清く坐つた膝の上に兩手を行儀良く置き、睫毛も動かさず語つてゐる語女の美しさは、實に目覺むるばかりである。

「しツ！」「しイツ！」「默れツ！」と制する聲は、滿場の騷しさを劈く様に、土間からも起つたし二階からも聞えた。けれども、三味の音色も語る節も、聽衆の耳には未だ達かないのである。

三味線彈も語女も、服裝は同じ白襟に黑縮緬の三つ柏の紋付で、片方は鐵お納戸の厚板の帶、娘は金茶繻珍の帶に紅入友禪の背負上を締めてゐる。髮は双方共に銀杏返しであるが、揉上げの長い語女の鬢の恰好は、宛然臺でも被つた様である。

「いよー男殺し！」と薄暗い二階の大入場から聲を掛けた者がある。

「小しゆんちやん大明神！」是は土間から起つた。

「馬鹿野郎！」と太い聲でそれを叱る者がある。

「蛙のお婆さん、確り頼むぜ。」是は三味線彈を冷評したのである。

漸と鎮まりかゝつた聽衆は、此の冷評で又どつと笑つた、が、其の笑聲の息んだ時は、不思議にも忽ち靜になツた。

「にくやこぼれてはら〳〵と露かしづく
かしづくかつゆか……」

と音締に連れて、調子の冴えた、仇つぽい聲が次第と場内に響渡つて來る。

語り物は清元の夕立である。節の心得ある者は節廻しの巧いのに驚き、節を聽く耳無き者も其の艶のある聲に聽惚れて、階上階下幾千の聽衆の心は、語女が小さき唇に動かされて、夢の如くに舞歩くのである。

「何うです、巧うがすな。」

瀧山と笠田と居る棧敷の背後に、何時の間にか二人の藝人が立つてゐる。此う云つたのは背の低い、五つ紋の羽織を着た男で、話し掛けられたのは、通例に外れて大きな身躰を、疲れた樣に其處の柱に攫つてる、紋織御召の小袖を足の隱るゝ程に着た、前の者の師匠でもある如く見える男なので。

「巧いね。是ぢや、喜代壽の三糸でも決して拙か無いね。」と師匠らしいのが熱心に舞臺を視詰めて云つた。

「第一、容貌が奇麗ぢやありませんか。」

「然うよ。」と師匠は感心した樣に首を傾げて、「それに此の喉だからね……、此樣な、語呂の利く喉は珍らしいよ。」

「全く巧いもんでげすな。」と云つて師匠を見上げて、「これぢや、必然旦那にぶつかりますなア。」

此の時・東のうづらから若い男の聲で、「いよ檜物町！」と褒めるのが聞えた。

場内寂然として、咳き一つする者もない。窓から風が吹込むのか、瓦斯の焰の微に鳴るのが聞えた。

「十のとしからお小姓をつとめとほして
おそば役 合「はたちはこせどいろ戀は……」

と語り進んだ時、西のうづらから突然拍手の音が起つた、かと思ふと、滿場宛然失念してゐた物を想出した如くに、其のぱち〳〵の音が棧敷から平土間、平土間から大入場と擴がつて行き、丁度夏の通雨の樣に、仕舞は東二階の隅の方でぱツたり消えて、場内は一段と寂然となつた。

「よ！　淫賣の大將！」と二階の大入場から怒鳴つた者がある。

而ると、其の近邊から隙さず、

「默れ！　馬鹿野郎！」と叱る聲が出た。

「何が馬鹿野郎だ？　百姓奴！」

「默らんか。」とまた別の聲が加勢した。

「撮み出すぞ。」是も別の聲である。

「しい！」と制する聲が八方に起つた。二階に居る巡査は、騷々敷い彼方を視詰めて起上らんとしたが、留場の男が宥めるので少し鎮まつたと見て、再椅子に腰を下した。高坐では二階の騷ぎなど耳にも入らぬ如く、身動きもせずに語續けてゐる。背後を向いて拳を振上げて居た客も、其の人を醉はせる樣な艶のある聲に引かれて、思はずもまた舞臺に面を向け、起ちかゝつた者は皆坐に着いた。

「あとはいらへもながづとのあぶらかを
りてなまめかし 合「ほれた男に手をとら
れとびたつ……」

場内の靜かになるに連れて、聲も糸も次第に冴えて來る。

「引込め！　引込め！」また二階から怒鳴る者がある。

「此畜生、疊んぢまふぞ！」

「何だと、生意氣なツ。」と云ふ聲と共に、がちやりと土瓶か何か投付けた音がした。

續いて七八人の高く罵る聲がして、廊下を駈ける足音が雪崩の樣に響渡つた。聽衆は皆起上つた。騷然たる間から、婦人や小兒の泣聲も聞えた。

三味線彈は撥の手を止めて、只だ呆氣に奪られて居る。語女も此の時初めて顏を上げ、切長の涼しい眼で、二階の彼方を見遣つたが、丁度假花道の上に當る前船に、舞臺の方ばかり視詰めて居る少年と遙に面を合はせて、片頬に靨を作らへて、眼で何やら云ふやうである……と、思ふ機に、床の簾がさら〳〵〳〵と卷下りて、其の姿は隱れて了つた。

第三

茶屋々々の店前は迎車に路を狹めて、袖に觸

る可き輪の間を横に駈抜けた二人の若紳士、ばたばたと鶴屋の店に入ると、

「お歸りなさいまし。」と三四人の男女が慌ただしく上口に出迎へた。

「さ、何卒お二階へ。」と帳場から禿げた頭の主人がお叩頭した。

「鳥渡小便に。」と獨語しながら、背廣を着た方は梯子の下を奥へと通つた。

一人の大島紬は女中の導くまゝ裏二階の六疊に上つたが、自分の家にでも來た樣に落着拂つて、床の柱を背に、懷手をして火鉢の前にべたりと坐つた。

「大層お早ございますこと……。まだ貴方、宜い處が些とも出ないツてぢやありませんか。」と女中は火鉢の火を穿くりながら馴々敷く云つて、何故だか、「ほゝゝゝ。」と笑つた。

客は何事か考へて居るものの如く惘然した顏をして、

「然うか。」とばかり、何やら獨りで點頭いたが卒に思出した樣に、「あツ、疾く勘定持つてお出で！」

「へえ、只今直に。」

「それから、鳥渡ね……。」とまで云つて默つて了つた。

「何ぞ御用ですか。」と緣側まで出た女中は又其處に突膝をした。

「いゝや、何アに、彼の……。」と云つたが、慌たゞしく莨をぷか〳〵〳〵とふかして、もやもやと煙を出して、其の煙の中から、「ま、勘定持つてお出で。」

「畏こまりました。」と女中は梯子の口まで行つたが、急に聲を張上げて、「旦那、瀧山の旦那、御腕車は如何でございます？」

「然うさな……、私は歸したが、笠田は何うだか。」

「然うですか、ぢやお後で。」と云ふかと思へば、跫音がとん〳〵と梯子を降りて去つた。

瀧山は火鉢に顏を翳して、其の火を視詰めて凝然と何やら考へて居たが、

「何うも、今日はお構へ申しませんで。」

と云ひながら入つて來た此家の主婦を見ると、喫驚した樣に面を上げて、其の機に指に挿んでた紙卷莨を火の中に落した。

「まア、煙りますこと。」と櫛卷の頭髪に、頸に白い絹半巾を卷いた主婦は、徐に膝を摺寄せてぽや〳〵と煙の立つ莨の始末に掛つた。

「あゝ寒いツ。」と入つて來た笠田は、障子をぱたり閉めて、行きなり足で坐蒲團を直しながら、「何うも馬鹿に寒いぢやないか。」と背廣の肩をぶる〳〵と搖つた。

「左樣でございますよ、此の二三日は何うしたツてんでせう、豈夫、まだ此樣な時候ぢやありますまいけれど。」と主婦は客の前に茶を出しながら云つた。

「時に主婦、」と笠田は其の茶を一口啜つて、「今の、清元を語つた小しゆんて奴ね、彼アア、中々別嬪だねえ。」

「左樣な相でございますねえ。手前共は未だ見は爲ませんけど、皆樣がもう、大層な御評判でございます、それに、」と瀧山に面を向けて、「藝だつて、中々確りしてるツてぢやございませんか、ねえ旦那、然うなんですか。」

「然うさねえ。」と瀧山は首を捻つて、「僕は、其樣なに感心はしないねえ。」

「感心しない？」と詰る樣な語調で、「ふん、感心しない者がまた、何うして彼樣なに夢中になるんだらう。我が話仕掛けりやとんちんかんな返辭したり、急に歸ると云ふかと思や、折鞄も紙入も置いたまゝで立たうとしたり。全躰彼ア何う云ふ譯なんだらう？」

瀧山は微に面を赧めたが、主婦を見てにやりと笑つたばかり、切りと莨の煙を出してゐる。

「左樣でございますかねえ。」と主婦は瀧山の肩を持つて、「ぢや矢張り、顏が奇麗なんで其樣なに評判するんですかねえ。」

「然うだらう。僕は彼よりも、彼の三味線の方が巧いと思ふねえ、實に好い心地だツた。彼樣な巧い三味線は聽いたことがないね。」

「へえ、三味線が？　左樣でございますか……、誰でしたツけねえ？」と云つたが、急に思出した樣に、「然う然う、喜代壽さんでしたねえ……。喜代壽さんなら貴方、其アもう、上手に違ひありませんとも、清元の大師匠なんですもの。」

「然うか、何しろ巧いもんだねえ。」

「ふん。」と笠田は鼻で笑つて、「主婦、瀧山樣は茶人だからね。」

爰へ女中は勘定書を持つて來た。瀧山は其れを廣げて見て、二圓廿錢と云ふ處へ五圓紙幣を出し、

「少し許りだが、釣は茶代に……。」

「まア此樣なに戴きましては、」と主婦は睜つた眼でぢろり瀧山を見たが、是迄に例の無い多くの茶代を、今日は何う云ふ譯であらうと訝りながら、「何もなんにもお構へ申しませんのにまア。」と其の紙幣を押戴いて、「毎度有難う存じます。」

「お腕車は如何致しませう?」と女中は瀧山の顏を覗上げて云つた。

「おや、お車夫はお歸しになりましたんですか。」と主婦は仰山相に云つて、顰めた顏を女中に向けて、「それぢやお前、伺ふまでもないぢやないかね、速く然う云つてお遣りよ。」

「ですけど、先刻も伺ひましたけども……。」と女中が不平らしい顏をすると、

「だから伺ふまでもないツてのにねえ。旦那方がお邸にお歸りなるのに、お徒歩でお歸りがなるものかならないものか、些と考へて御覽よ。餘り氣が利かな過ぎるぢやないかね。」と困つた者だと云ふ樣な顏をした。

「何も濟みませんでした。それでは、一人乘二臺でございますか。」

「當然だアね。速く云つてお遣り、成るたけ奇麗なのを寄越してお呉れツて。」

「おい〳〵、鳥渡待つて呉れ。」と瀧山は急に呼止めた。

「へえ。」と女中は立止つた。

「何ぞ御用でございますか。」と主婦は瀧山の顏を覗いた。

「何したんだ?」と、瀧山が考へてゐるので、笠田も訊ねた。

「君は何だらう……。歸らなきやなるまいね?」

「いゝや別に……。何故?」

「何だい、何處其邊で、飯を食うぢやないか。」

「宜からう。」

「而して、何を呼んぢや何うだらう……、彼を。」

「彼ツて云ふと?」と云つても默つて居るので、笠田は笑ひながら瀧山の耳に口を寄せて、「縫之助だらう。」

瀧山は、其聲が面前に居る主婦の耳に入つたとでも思つたか、少し面を赧くしたが、

「いや、僕は彼の何に、三味線彈いた女に飯を食はさうと思ふんだが、何うだらう、可けまいか。」

「三味線彈いた? ぢや喜代壽か。」と呆れた樣な顏をして、「止し給へよ、なんだ、彼樣なでく〳〵肥つたお婆さんなんか……。止し給へ、何うせ呼ぶなら、小しゆんでも呼び給へな。詰らないッ。」

「併し、僕は酷く感服したからね……。」

「旦那、それぢや二人ともお呼びなすツちや如何でございます?」と主婦は瀧山に膝を進めた。

「然うさなア。」と面を上げて、「併し、來るだらうか。」

「誰です? 小しゆんですか。えーえツ、參りますとも、今藝人になツたばかしですもの、御贔負の旦那が呼んで下さるツて聞かうもんなら、もう飛んで參りまさアね。」

「然うか知ら、ぢや笠田、呼んで見ようか。」

「はゝゝゝゝ、到頭本音を吹いたね、僕も何も可笑いと思つたよ、幾ら瀧山樣が骨董好だと云つて、布袋の樣な、彼樣な肥滿のお婆さんと一緒に、お飯食ひたいツて理窟は無いと思つたが、はゝゝゝゝ、矢張り辨天樣の方に氣があるんだ、はゝゝゝゝ。」

瀧山は切りと莫をふかしながら、

「君ぢやあるまいし、なア主婦、はゝゝゝゝ。」

「左樣でございますかねえ、おほゝゝゝ。」と主婦も愛想に笑つたが、「ぢや旦那、二人とも呼びに遣つて見ませうか。」

「あ、然うして貰はう。」

「僕なら、彼樣な婆アなんか拔にして貰ひたいんだが。」と笠田は笑ひながら。

「まア其樣な我儘云ひ給ふな、今夜一晩ばかし、默つて附合つて呉れても可いぢやないか、ねえ主婦。」

「左樣でございますともねえ、おほゝゝゝゝ。」と笑つて、「それでは、直ぐ見せに遣はしませうねえ。」

主婦は階下へ降りて去つた。暫くして、女中が急須へ湯を注して再び坐敷へ出ると、笠田ばかり切りと饒舌つてゐる處で、

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com